

L1とL2の意味の違いと学習者の認識

白 以 然*

1. はじめに

今井 (2010) は「言葉は世界を切り分ける」という。人は自分の住んでいる世界のさまざまなモノ、概念などに「言葉」というラベルを貼ることによって世界を整理し、把握しているとのことである。ここでどこまでを1つのカテゴリーとして束ねるかは文化や言語によって変わる。例えば、英語の *jog, dash, run* などの動詞は日本語にすれば「走る」という1つのカテゴリーに対応する。また、日本語では「食べる」と「飲む」のカテゴリーがはっきり分けられるが、韓国語では「飲む (마시다)」は「食べる (먹다)」のカテゴリーに含まれる形になっており、韓国語を母語とする学習者は「菓を食べる」のような誤用を犯すことがある。また、同じ言語だといっても意味の範囲やその内容は時代によって変わることもある。このように目に見えない抽象的な領域である上、流動的であるので、意味は科学的で客観的な分析を求めた古典的な言語学で音声や統語領域に比べ疎かに扱われる傾向があった。L2教育でも、構造主義に基づいたオーディオリンガル法の下では正しい発音や文法の習得が優先視されたのも事実であろう。このように統語や音声に比べ、遅れを取っていた意味論の分野に新しい風を吹き込んだのが Lakoff, Johnson などの言語学者による認知意味論である。認知意味論は、人間が持っている普遍的な認知能力を比較したり、似ているものを束ね

てカテゴリー化する能力や身体性から様々な言語表現を分析する。特に、普段使われる多義的意味や比喩的な表現を偶然の産物ではないとし、多義間の繋がりを統一的、かつ体系的に説明することを試みている。

本稿では、認知意味論のイメージスキーマの概念を用いて日本語の複合動詞「～出す」とその韓国語対応語「～내다 (naeda)」の意味領域の違いを見せ、その違いが韓国語を母語とする学習者 (以下KO) の「～出す」の概念にどのように影響するかをみる。ここでイメージスキーマとは、「概念構造の形成に先行し、日々の具体的な経験の中で繰り返し現れるパターン、形」(松本2003)である。言い換えれば日常の経験から得られた具体的なイメージが抽象化して1つの概念を形成し、様々な領域にも使われるようになることである。例えば、英語の「in」は、そもそも (1a) のように1つの物理的な空間の中にある状態を表す。具体的な空間の中に何かが置かれていることを表す「in」は普段の生活でよく見かけるもので、これが繰り返され、「in」のイメージを形成し、(1b) のように具体的な場所ではない社会的な空間の中にある状態も「in」で表現するようになる。これが (1c) になるとさらに抽象化され、目では境界が観察できない心理的空間の中にある状態へと変換する。

- (1) a. He is in the living room. (物理的な空間)
- b. He is in a great team. (社会的領域)
- c. He is in a good mood. (心理的領域)

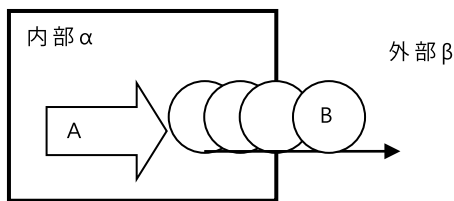
*高麗大学校

このようにイメージスキーマ変換とは人間が自分の身体、または、普段観察、体験する空間的なイメージを、他の領域に写像 (mapping) することである。上記の「in」は、ある仕切られた空間、即ち1つの容器とその内容物の関係を表しているので「容器のイメージ・スキーマ」と言われるが、これは日本語の様々な空間移動動詞からも観察でき、本稿の対象である「出す」にも適応できると思われる。

2. 「出す」の意味

2.1 本動詞「出す」の意味とイメージスキーマ

動詞「出す」は一般的にものを内部空間から外部空間へ移動させる様子を表すが、『大辞林 (第2版)』にその意味が27項目に分けて述べられている多義語である。これは、韓国の対応語である「내다 (naeda)」に関しても同様で、韓国の『標準国語大辞典』には28項目にも及ぶ意味が記述されている。「出す」は、対象を内部空間から外部空間へ移動させることであるので、その「内部空間」「移動を働きかける力」「対象」により様々な意味が分類できる。便宜上、内部空間を α 、外部空間を β 、動因をA、対象をBとし、イメージスキーマとして図示すると、〈図1〉のようになる。



〈図1: 「出す」のイメージ・スキーマ〉

これらの要素がどのような領域に適用されるかにより、様々な意味を生み出しているが、代表的な例を挙げてみると (2) のようになる。

(2) a. かばんから書類を出す。

- b. 先生に宿題を出す。
- c. 息子を東京に出す。
- d. 左手を出してください。
- e. 私の名前は出さないで。
- f. アルバムを出す。
- g. 火事を出す。

(2a) はもっとも基本的な意味 (プロトタイプ) であり、具体的な区切りで区別される内部空間と外部空間が存在し、具体的なモノに物理的な力を加え、移動させている。(2b) では内部空間 α が「自分の手元」、(2c) では「自分や対象に近い所」で、内部空間 α と外部空間 β の境界は背景化されており、(2d) は内部空間 α が身体である。ここまでは実際に移動する対象や具体的「移動」が存在し、すべての対象Bにおいて位置変化が起きている。具体的な空間の間のものの移動を表すプロトタイプを中心として、内部空間 α がさまざまな領域に適用されていることである。(2e) になると、外部空間へ移されたことを、見えなかったものの現われとして捉え、移動が背景化する。(2f) や (2g) は、もはや「内部空間」を囲んだ容器は背景化し、「見えない、存在しない状態」が「見える、存在する状態」へと変わる。このように具体的であったプロトタイプから抽象化していくにつれ、Bは具体的なものから抽象的な事態へと拡張されていく。内部空間 α は実際の境界のある空間から主体の手元、公の目に見えない状態に、 β は外部空間から主体から遠い所、公の場、存在する状態に変化していくのである。

韓国語の「내다」も「出す」に類似した意味合いを持っている。代表的な意味をまとめると (3) のようである。

- (3) a. 냉장고에서 반찬을 내다.
(冷蔵庫からおかずを出す)
- b. 선생님께 숙제를 내다. (先生に宿題を出す)

- c. 용기/힘을 내다. (勇氣/力を出す), 화를 내다 (怒る), 겁을 내다 (怯える)
- d. 신문에 광고를 내다. (新聞に広告を出す) 책/앨범을 내다. (本・アルバムを出す)
- e. 성과/신기록/통계/결론을 내다. (成果・新記録・統計・結論を出す)
- f. 박살/흠/끝장을 내다. (粉々にする、傷つける、終わりにする)

(3) からわかるように、韓国語の「내다」も日本語の「出す」と同様、「容器のイメージスキーマ」を介して、具体的なものの移動から感情の表出、創出まで意味が拡張していく。ただし、「내다」の方が感情の表出の意味が多様であり、状態の変化を破局の事態として捕らえるなど抽象的な表現が発達している傾向がある。

この2つの語彙は、ともに複合動詞として使われるということも共通している。

2.2 複合動詞「～出す」

日本語の複合動詞は前項動詞の連用形に後項動詞を結合したもので、日本語の動詞で相当な割合を占めている。森田 (1994) によると、『例解国語辞書』に収録されている動詞4622語のうち、単純動詞は2083語 (45.07%)、複合動詞は1817語 (39.29%) で、単純動詞と複合動詞はそれほど変わらない数値を示している。後項の「～出す」はこの中でも高い頻度を示す項目である。複合動詞を量的に調査した国立国語研究所の『複合動詞資料集』(1987) に記載されている複合動詞構成要素2166語の中で、「～出す」は延べ432語で「～得る」とともに1位である。このように高い頻度であることは、学習者においては習得が求められる複合動詞であると同時に、接した可能性が高いともいえる。

こうした複合動詞としての「～出す」も本動詞と似たような意味の展開を示す。姫野 (1999) などを参考に「～出す」の意味をまとめると (4) ~ (5) のようである。

- (4) [移動]
 - a. 핸드バックから手帳を取り出した。
 - b. ケースから本を抜き出した。
[顕在化－顕現]
 - c. ヘッドライトが人影を照らし出す。
[顕在化－創出]
 - d. 素晴らしい作品を作り出してきた。

(4a, b) のような [移動] は本動詞同様、具体的な対象の物理的な移動を表す。「顕現」はもともと見えなかったもの、隠れていたものが、V1 という動作を通して露出される意味である。これは本動詞と同様に「外部への移動は見えなかったものの出現」という経験が1つのイメージを形成して、何かの露出が「～出す」で表せるようになったことであろう。このように隠れていた物事の露出を表す [顕現] が、存在しなかった新しいものや事態の出現、即ち「創出」の意味へと転じる。ここまでは本動詞の展開と似ているが、複合動詞としては (5) のような開始のアスペクトの意味を持っている。これは [創出] が新しい事態の始まりとしてさらに抽象化されたといえるだろう。

- (5) [開始]
 - a. 急に雨が降り出す。
 - b. その話を聞くと、彼女は突然泣き出した。

韓国語の「～내다」も複合動詞として使われるが、その意味や用法は「～出す」と類似している。

- (6) [移動]
 - a. 어머니는 화가 나서 철수를 쫓아냈다.
(母親は激怒してチョルスを追い出した)
[顕在化－顕現]
 - b. 옛 일을 기억해내다. (昔のことを思い出す)
[顕在化－創出]

- c. 작품 속에 젊음의 열정과 개성을 그려내다. (若さの熱情と個性を作品の中で描き出す)

(6) からみられるように「移動」の意味から「創出」までは「～出す」と共通している。しかし、「～내다」はアスペクトとして「開始」とは反対とも言える「完遂」を表す。

(7) [完遂]

- a. '헤냈다' 는 생각에 눈물이 났다.
(「やり切った」と思うと涙がこぼれた)
- b. 마당의 잡초를 전부 뽑아냈다.
(庭の雑草を全部抜き終えた)
- c. 오랜 연구 끝에 겨우 알아냈다.
(長い研究の末、かろうじて究明した。究明し出した)

こうした「完遂」の意味も「創出」の拡張として理解できる。「創出」とは、1つの事態（考える、作る）が終わり、その結果、新しい事態が出現する動作を意味する。例えば、「그려내다（描き出す）」は「描く」ことにより作品が「完成し」「誕生した」ことを意味する。「完成」に焦点を合わせると、主体の強い意志の伴う「完遂」の意味へと転じることである。

このように、両語は基本的に外部への移動を表し、創出の意味へ展開してそれが時間のアスペクトを表すようになることは共通している。「～出す/～내다」が「創出」の意味で使われるときは、ある過程の結果、新しいものが出現したという意味になるので、「完成」と「発生」の2つの事態が重なる接点にあるといえる。「考え出す」「作り出す」などは、1つの事態（考える、作る）が終わり、その結果、新しいものや事態が出現したことを表す。それで、創出の「～出す」は「動作の完了を表す「～上げる」と共通のことが多い」（田辺1983）という。しかし、「作り出す」は何かで作られ「出現する」ことに焦点があるが、「만들

어내다」は、作る行為を完遂したという含みがより強く「作り上げる」に近いといえる。「洗い出す」は、何か隠れていた事実を露出、出現させる、顕にするという意味であるのに対し、「씻어내다」は汚れなどを無くす、水で洗って自分の領域から外のほうに完全に排出するという意味である。

このように外部空間への移動が「開始」または「完遂」へと転じていく両語の差は、基本的に同一の現象を異なる心的視点から眺めているから、言い換えれば、心的視点の相違から起こる問題だと思われる。同じ現象が視点の位置によって、反対の意味になることは日常の言語生活でも一般的に観察されることである。例えば、同じ坂を「どこから見ているか」によって「上り坂」とも「下り坂」とも言える。主体が統制できない急な「開始」は移動を外部から眺めており、主体の強い意味を伴う「完遂」は移動を内側から眺めているといえる。それ故、姫野（1999）が述べたように、開始の「～出す」は意志的表現（命令、使役など）の文脈には現れにくく、寺村（1984）のいったように「『始める』よりも突然、だしぬけに、といった感じが強い」と思われる。これに対し、完遂の「～내다」は、自分の気持ち、長い時間を伴う努力を表す言葉と一緒に使われる傾向がある。「～내다」は主体の強い目標達成認識が含まれていることが多いので、単なる「完了」とは区分され、「完遂」「成就」の意味として定義される。

3. 韓国語母語話者の「～出す」認識

上述した両語の差が「～出す」の意味理解に影響を及ぼすか、すなわち、L1「～내다」の意味概念がKOの意味領域にどのように影響し、日本語母語話者の判断と違いをみせるかを見る。ここで母語の影響を論ずるためには母語の異なる他の学習者とも比較しなければならないので、対照群として中国語母語話者にも調査を行った。調査は複合動詞「～出す」の入った様々な文を読ん

だ自分の感じを4段階（1.自然である－2.まあまあ自然である－3.あまり自然ではない－4.不自然である）にチェックする文受容判断テスト（acceptability judgment test）で、韓国語の完遂の「～내다」を直訳した文と正しい「～出す」文を混ぜて提示した。被験者の構成は（8）のとおりである。

- (8) ① 韓国人日本語学習者 (KO)：110人（韓国の大学の日本語関連学科3～4年在学）日本語レベル中上級、学習年数2～5年
 ② 日本語母語話者 (JA)：20人（東京の大学に在学）
 ③ 中国人日本語学習者 (CH)：89名（中国の大学の日本語関連学科3～4年在学）日本語レベルは中上級、学習年数は3～4年

すべての文が日本語にすれば不自然、韓国語にすれば自然であるにも関わらず、KOの反応には文による違いが見られた。JAは誰も受容していないが、KOに多く受け入れられた項目の例を挙げると（9）のようである。括弧の数字は1か2を選んだ割合（受容度）である。

- (9) a. これで庭の雑草は全部抜き出したね。(84%)
 b. この小説を全部書き出すのにたった1週間しかかからなかったそうです。(75%)
 c. お母さんは1週間かけて、すばらしいセーターを編み出した。(71%)
 d. 大変な仕事だったが、一人で済み出した。(55%)

これらの文は「移動」「創出」などの意味として解釈でき、KOはL1の意味をそのまま転移させるのにあまり違和感を感じなかったと思われる。これに対し、(10)のような文に関しては50%以下の受容度を示していた。

- (10) a. どんなにつらいことがあっても耐え出す覚悟はしています。(42%)
 b. 3年間の取材の末、知り出した事実は、衝撃的なものであった。(32%)
 c. 彼は死ぬまでその秘密を守り出した。(21%)

(10)の文は純粋な「完遂」としか解釈できない項目であり、これらの文に関してはL1としては自然な表現であるにも関わらず、受容度は下がっている。これはKellerman (1979など)の研究からわかるようにL1で典型的で、頻度の高い項目はL2の意味へ転移されやすいことがその要因であろう。学習者に行ったインタビューでも「韓国語の「뽑아내다（抜いて出す）で自然だから」のように受容理由を述べていた。L1でプロトタイプである「具体的な移動」として受け入れ、自然に転移が起こるといえる。また、日本語の意味から考えても、移動の「～出す」として解釈でき、何の違和感も感じなかったと思われる。これに対して(10)の例文はL1でも拡張した特殊な表現として受け止められる項目でL2へあまり転移されなかったと思われる。学習者は「韓国語を無理やり直訳した感じだ」のように非受容の理由を述べていた。学習者はL1の表現すべてがL2の日本語に直訳できるわけではないという意識を持っていたといえる。

一方、KOとCHを比較をしてみると、全体平均が各々57% (KO)、44% (CH)で、CHのほうが低い。JLPT1級保持者のみを比較してみると、両グループ共に、受容度が低くなりJAに近づいていくわけであるが、CHが平均34%であるのに対し、KOの平均は44%で、同じ上位群であっても、KOがより受容する傾向を示した。特に、CHの場合(10b)と(10c)の文はほとんど受容されないが(各々3%、0%)、KOは各々9%、12%の受容度を示している。上級になっても、L1の

影響から完全に逃れられないことが示唆された。

4. まとめ

L1の語彙の意味がL2に影響を及ぼすことは、多くの研究から指摘されている。Tanaka & Abe (1985)、Ijaz (1986) は、学習者のL2意味領域の範囲が母語話者と異なることを明らかにし、その要因は学習者がすでに持っているL1の意味領域の影響によると述べている。このように、学習者のL2語彙の概念形成は、すでに形成されているL1概念に深く関わる。Odlin (2005, 2008) は、意味転移の中で、特に様々な時間、空間把握概念におけるL1の転移を取り上げ、L1で世界を把握する見方や概念がL2に反映されるといい、母語が人間の世界を見る観点を決めるとしたWhorf理論の復権を試みる。こうした研究を通して、一時疑問視されていたL1の影響は、少なくとも意味と概念に関しては再評価されるようになってきている。

本稿では日本語の「～出す」とその対応語である韓国語の「～내다」の意味を分析し、その意味の違いが韓国語を母語とする学習者の「～出す」認識にどのように影響するかを考察した。その結果、学習者がL1のすべての意味をそのままL2に適用することはなかった。また、レベルが上がるにつれ、言葉の意味に関する知識が体系化し、新しいカテゴリーを習得していくので、L1の直訳から離れ、母語話者の感覚に近づいていくことも観察された。しかし、上級になってもある程度母語の概念の影響が残っていた。学習者は母語話者のような自然な語彙カテゴリーの形成が難しく、L1とL2の意味が混在していた。

こうした現状に対し、辞書式の直訳よりは語彙の意味構造と意味間の関わりをわかりやすく提示すること、また、L1とL2の意味が重なる部分や、拡張によって異なる部分を明らかにし、そのずれの原因を説明することも1つの代案になりうると思われる。

〈参考文献〉

- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』 岩波新書
 田辺和子 (1983) 「複合動詞の意味と構成：「～ダス」, 「～アゲル」を中心に」 日本語と日本文学 3, pp.40-49
 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』, ひつじ書房
 松本曜 (2003) 『認知意味論』 大修館書店
 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 明治書院
 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房
 Ijaz, H. 1986 *Linguistic and cognitive determinants of lexical acquisition in a second language. Language Learning* 36 pp.401-451
 Kellerman, E. 1979 *Transfer and non transfer: where we are now. Studies in second language acquisition* 2, pp.37-59
 Lakoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things - What Categories Reveal about Mind.* the University of Chicago press (池上、河上 他訳1993 『認知意味論』 紀伊国屋書店)
 Odlin, T. 2006 *Could a contrastive analysis ever be complete? In Avabski, I. (ed.) Cross Linguistic Influence in the Second Language, pp.22-35*
 Odlin, T. 2008 *Conceptual transfer and meaning extensions. In Robinson, P. and Ellis, N.C. (eds.)*
 Tanaka, S. and Abe, H. 1985 *Conditions on interlingual semantic transfer. TESOL 84: A brave new world for TESOL, pp.101-120*